

“Spatial Planning following Disasters”の国際シンポジウムとワークショップを開催しました(2013/12/12-15)

テーマ: 復興計画

場 所: 東北大学青葉山キャンパス青葉記念会館

2013年12月12日に東北大学青葉山キャンパス青葉記念会館において、「災害後の空間計画」をテーマに国際シンポジウム（主催：災害科学国際研究所 都市再生計画技術分野・防災社会国際比較分野、支援：CONCERT-Japan）を開催しました。本シンポジウムは、計画分野の専門家11名が5ヶ国（日本、インドネシア、アメリカ、スロバキア、ドイツ）から集まり、災害後の復興計画の経験を国際的に共有・比較することで、共通の問題点や教訓を明らかにし、よりよい復興を成し遂げるためのヒントを得ることを目的として行われました。具体的には、日本は東日本大震災（2011～）、インドネシアはスマトラ沖地震（2004～）、アメリカはハリケーンカトリナ（2005～）及びドイツはエルベ・ドナウ川の洪水（2013～）からの復興努力について都市計画・土地利用の側面に焦点をあてたプレゼンテーションを行いました。スロバキアは、新たな災害・計画ガバナンスの立ち上げ努力について、治水シミュレーションモデル事業の事例を通じたプレゼンテーションを行い、同様な議論が行われ始めている世界各国に対しての示唆となりました。当日は、50名以上の官民を含む専門家や学生の参加があり、多くの質問や活発な議論が行われました。当研究所からは、今村文彦教授(副所長、津波工学研究分野)、村尾修教授(国際防災戦略研究分野)、姥浦道生准教授(都市再生計画技術分野)、井内加奈子准教授(防災社会国際比較研究分野)が参加し、姥浦道生准教授が「Reconstruction plans and planning processes after the Great East Japan Earthquake」、井内加奈子准教授が「Disaster risk management and land use in Japan: In geography vulnerable to water-related disasters」と題して、研究発表を行いました。

シンポジウムの翌日13日には、災害復興と空間計画に関するさらなる各論的問題の掘り下げや情報の共有を図る目的で、発表者を中心としたワークショップが行われ、次の項目を中心に議論されました。1)空間計画が災害リスク管理のツールの一つとしての役割を担っているか？ 2)レジリエントな都市を再構築するためにはどのような復興計画の戦略やツール(実現制度など)が必要か？ 3)レジリエントな都市の再構築を目的とした計画プロセスの中で、組織的なコーディネーションや市民の参加はどうあるべきか？ 4)将来の不確実性に備える方法はあるか？

会議終了後の14日からは、東北地方沿岸部の被災地（岩沼市、名取市、石巻市、南三陸町、気仙沼市）の現地調査が2日にわたって行われ、被災からほぼ3年が経過した段階での復興状況について活発に意見交換されました。



シンポジウム発表者記念撮影

文責：井内加奈子（人間・社会対応部門）